

老舎はなぜ 自ら命を絶ったのか



序章

1966年8月24日、北京の西北の角に位置する太平湖公園のベンチに、一人の男が腰を下ろしていた。一日じゅう座り続けていた。その日の夜、男は太平湖に入り自らの手で67年の人生の幕を下ろした。男の名は老舎、本名舒慶春。当時すでに世界的な名声を得ていた文学者であった。

それから33年後、1999年11月27日の午前5時40分、上海華東病院で趙清閣という名の女性が静かに息を引きとった。享年85歳だった。

2001年5月21日には老舎の妻、胡絜青が96歳の老を遂げた。

老舎の人生に深く関わる二人の女性が亡くなったあと、それまで関係者しか知らなかった事実が公表され、中国のネット上でさまざまな意見が飛び交った。

最も人々を驚かせたのが『林斤潤説（林斤潤は語った）』という本の内容である。

林斤潤⁽¹⁾は語った。「1938年、武漢で中華全国文芸界抗敵協会(文協)が作られようとしていた。老舎はそのとき中間派で国民党と共産党共に受け入れることができたので、常務理事兼総務部部長となった。これは協会の全責任者ということになる。周恩来は抗戦宣伝用の文芸月刊誌『弾花』の編集長で24歳の女性作家、趙清閣を老舎の秘書にすることを思いついた。」

7月に武漢が(日本軍の攻撃で)緊迫した状態になると趙清閣は老舎に従って重慶に行った。彼ら(老舎と趙清閣)は一時期同居していた。1940年に林斤潤が重慶に来て国立社会教育学院に勤めるが、彼は老舎と趙清閣の関係は知らなかった。だが彼の師である梁実秋⁽²⁾と鄭君里⁽³⁾は知っていた。

趙清閣は酒豪で、老舎と同じく勤勉にペンを動かす作家で、二人で協力して戯曲『虎嘯』『桃李春風』を完成させた。

だが1942年10月、胡絮青が三人の子供を連れあちこちを經由してやっと重慶にたどりつき、北碚に住み着いた。趙清閣は身を引くしかなかった。(原文A)

本の著者である程紹国⁽⁴⁾が林斤潤から聞いた話として、老舎と趙清閣が一時期同居していたと書いたことで二人の「婚外情」つまり不倫が話題になりネット上にさまざまな記事が出てきた。実際には同居の事実はなかったのだが、老舎があまりにも有名であったためスキャンダルとして扱われた。2015年11月20日には『北京晩報』に「趙清閣が1947年に発表した短編小説「落葉無限愁」は老舎と趙清閣をモデルにしたものだ」という記事が載った。



短編小説「落葉無限愁」は妻子ある中年大学教授と若い女性画家の悲恋を題材とした小説である。ある土地で、一人の大学教授が若い女性画家と出会い恋に落ちた。だがその恋は教授の妻子が突然、夫のもとへやってきたことで終わりを告げた。妻子と住みはじめた教授と別れ傷ついた心を抱いたまま、画家は実家のある上海に戻っていった。

そして1945年に中国が日本に勝利すると、「これからは新しい時代が始まるのだ」と教授は興奮し、自分たちの再生への希望を抱き画家への想いが募り、妻子を置いたまま彼女のあ

老舎の章 Part 1

老舎の家庭

老舎は 1899 年 2 月 3 日、姉三人、兄一人の兄弟の末っ子として北京で生まれた。1900 年の義和団の乱のときに皇帝の居城の警護兵であった父親が亡くなると、母親は苦勞して子供たちを育て上げた。ある篤志家の援助で私塾に通い、それから小学校に通い、卒業後は働くことを求められたが学業を続けたいという意志は固く、学費が無料の師範学校に入学した。

19 歳で北京師範学校の第一期生として卒業すると京師公立第十七高等小学高の校長として赴任した。23 歳のときに母親が結婚相手を決めてきたが老舎はそれを断固として拒否した。当時は子供の結婚を親が決めることは当たり前であり、このとき母親を悲しませたことが老舎の心には大きな痛みとなって残った。

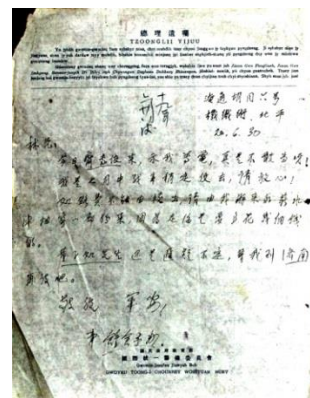
25 歳のとき中国語教師としてロンドン大学の東方学院に赴任した。実は 22 歳のときに彼は洗礼を受けてキリスト教徒に改宗しており英語も勉強していた。教会の牧師や英語を教えていた教授の推薦を得てのイギリス行だった。

ロンドンには 5 年間滞在し、1930 年の初夏に北京に戻ってきた。それからすぐに済南大学に赴任することになった。

2015 年 8 月 6 日付の『齊魯晩報副刊』に、新たに発見された一通の手紙から、老舎がなぜ済南大学に行ったのか、その理由を推測した記事が掲載された。



当時の齊魯大学



老舎の手紙

抗日戦争前の山東省の老舎について語る前に、林济青は必ず取り上げなければならない人物である。抗日戦争以前、老舎は山東省で 7 年間、文学創作における黄金時代を歩いた。林济青は何者か？ 彼は私立齊魯大学と国立山東大学の校長代理で、老舎が大学の講義室へ入るのを導いた人物である。1930 年の夏、老舎は済南に行き齊魯大

学で教鞭を執ることになったが、そのときに校長代理だった林済青がこの件を成功させる重要な鍵を握っていた。その年にもし彼の強力な引きがなかったならば、老舎と山東省の7年間の睦まじい関係は生じなかつただろうし、この作家兼教授の個人史も書き直さなければならなかつたかもしれない。

……

老舎はなぜ北京の近くではなく遠い齊魯大学の招聘に応じたのか？ 当然ながら北京で教えることは困難だったからだ。老舎は当時の北京大学、清華大学、北京師範大学で教えるには学歴が十分ではなかつたから行くことができなかつたと指摘している研究者がいる。しかし、齊魯大学はキリスト教系の私立大学だから敷居はいくらか低いものの、権威ある人物の強力な推薦がなければ老舎は入り込むことができなかつただろう。

……

陳文(陳逸飛 雑誌記者)が淹通胡同(友人の住んでいた所)に逗留していた老舎を初めて訪問したのは5月25日の昼で、そのとき老舎は天津から戻ってきたばかりで昼寝をしていた。門の外にいた白老爺(友人の父親)に断られて彼は老舎に会うことができなかつた。老舎は天津で何をしていたのか？ 友人たちを訪問するのは当然として、可能性の一つに南海大学の張伯苓学長を訪問したことが挙げられる。老舎と張伯苓は古くからの付き合いがあるのだ。

1922年、老舎は南海中学校の中国語教師として張伯苓に雇われ、1928年に張伯苓がヨーロッパ列国に旅行したときにはロンドンで彼と会っている。張伯苓は中国におけるキリスト教教育界のリーダーで、1925年には齊魯大学の理事長になっていることを知っておかなければならない。1930年に老舎は帰国し天津に行つて張伯苓を訪問し、これによつて老舎の齊魯大学への推薦、紹介がなされた、という可能性が高い。もちろんこれは推測に過ぎず、まだ信頼に足る証拠はない。

林済青宛ての手紙には次のように書かれている。

今日、齊さんを特別につかわして私に電報をくださったこと、まことにおそれいります。私は7月に戦況が少し落ち着いたらすぐに行きますので、どうかご安心ください。旅費の捻出が難しいので、将来の私の給料の一部を送ってください。

なぜなら海路は費用が多くかかるからです。

董子如(言語学者)先生はまだためらつて決めかねていますが、その件は私が済南についてからお話ししましょう。 舒舍 敬祝，筆安！ 30.6.20 (原文A)

当時の中国はまだ中華民国政府の統治が完全に行われているとは言えず、政府に反旗を翻す地方政権があちこちで樹立され軍事衝突も起きていた。老舎は陸路で行くよりは安全な海路のほうを選んでいたことがわかる。

ともあれ、老舎は無事に職が決まり、あとは思い切り執筆活動ができると意気揚々として

いた。ロンドン滞在時に書いた長編小説『張さんの哲学』が好評を博していたのだ。当分結婚する気はなかった。だが友人たちから強くすすめられて、友人の一人に紹介された胡絮青と結婚した。母親を早く安心させたいという気持ちもあった。胡絮青も老舎と同じく満州族の旗人であり、両家ともにこの縁組に不満はない。

旗人というのは清代の「八旗」と呼ばれる軍事組織に所属していた者を指し、もともと支配者階級で各種の特権を与えられていたが、時代が経つにつれ窮乏する者たちも現れた。だが自分は旗人の出身であるという誇りだけは高く持っていた者が多かった。



結婚式はキリスト教式で挙げたが、披露宴は伝統的な中国式で行い、二人は山東省の済南へと旅立っていった。胡絮青も北京師範学校を卒業していたので齐鲁大学附属中学の教師の職を得た。

抗日戦線への参加＝家庭からの逃避か

山東省にいた七年のあいだに老舎は三人の子の父親となった。子供が生まれたら生活が子供中心に回るといのはだれでも想像がつく。子供が三人となるとどうなるか。散文「子供を持ったあと（有了小孩以后）」では実にこまごまとした生活の状況がユーモアたっぷりに描かれている。出だしはこのようになっている。

芸術家は芸術を妻としなければならない。ということは実際には一人身でいなければならないということだ。ひまができた時には私はいつも小説を書いているが、一回も自分が文学における芸術家だと思ったことはない。それでも家庭のわずらわしさを感じたことはある。油、塩、みそ、酢が足りなくなると、一人だったら腹いっぱい食べられて天下泰平、どんなにいいことかと思ってしまう。

家族の煩わしさはほとんどが子供によって引き起こされる。教育費の問題はさておき、いたずらしたり泣きわめいたりされると大いに心をかき乱される。(原文 B)

子供が増えて経済的な悩みも抱えるようになった老舎夫婦は、子供が原因で起こるトラブルに振り回され、子供たちの泣き声が響く中、「もう離婚だ！」と叫びながらどたばたする。

しかし天使のような子供の寝顔を見るとそれまでのことはすべて忘れ、「でも、これは少しも家庭の中の愛を育てるのに妨げとはならず、人生の巧妙さ、素晴らしさはここにあるようだ。」と悟ったような文章が続く。

この散文が発表されたのは1936年11月25日である。翌1937年の7月7日、盧溝橋事変が起こり、中国は日本との戦いに突入した。11月に済南中国共産党の主催で行われた「山東省文化界抗敵協会」に老舎も参加した。そして日本軍が山東省に侵攻するとすぐに抗日活動に参加するため、妻と三人の子供を済南に残し、一人で武漢に旅立った。一番下の娘はその年の8月に生まれたばかりだった。

このとき老舎がとった行動は、これまでは「国難に際し身を捨てる覚悟で立ち上がった勇氣ある行動」として称賛され、夫を快く送り出しその留守を一人であずかる妻の胡絮青は中国女性の鑑として称賛された。

ところが胡絮青が亡くなったあと、この老舎の行動に対して批判的な意見が出されるようになった。文学研究者・雑誌編集者の呉宮洲は2011年の『各界』第9期に書いている。

「抗日戦に身を投じる」というのは、表向きは堂々として体裁のよい理由だが、老舎のやり方は常識を超えている。それに、敵の占領下に入った者がすべて漢奸（裏切り者、売国奴）となるわけではない。（原文 C）

「常識を超えている」というのは、乳飲み子を含む三人の子供と妻を戦火に巻き込まれるかもしれない土地に残して一人だけで武漢に行ったことを指している。当時はお手伝いの女性が二人いたので合計六人の生活を妻が一人で支えなければならなくなったのだ。「漢奸」という表現は、老舎が、「もしも捕らえられ漢奸になることを強制されたらどうしよう。」というのを武漢行の理由に挙げたことを指している。

私の心は焦ったが どうしたらいいかまったくわからなかった。知らされる戦争の状況はだんだん悪くなっていた。街が突然敵に包囲され捕えられるかもしれないと恐れた。死ぬのは小事だ。だがもしも捕らえられ漢奸になることを強制されたらどうしよう。この恐怖が日夜私の心の中を巡っていた。そうだ、私は済南にいて財産も金もない。敵が入って来て、私は多くの損失に耐えられないかもしれない。しかし一人の知識人にとって最も貴重なのは気骨である。私は敵が来て私のその宝を奪い去るのを待つてはいられない。私は急いで行かなければならない。（原文 D）

老舎はこのとき、結果的には妻と子供の命を守ることより、自分の知識人としての気骨を守るほうを選んだのだ。老舎研究家の傅光明は、『書信世界里的趙清閣与老舎（手紙の世界の中の趙清閣と老舎）』の中で、長いあいだ老舎と沈從文を身近で見てきた女流作家、韓秀のことばを引用している。

私には、彼ら（老舎と沈從文）には一つの共通点があるように思えます。それは二

人とも、機会があればいつでも家庭を捨てようと思っていた男性である、ということ。抗戦というのは立派な理由になり、彼らは妻子を捨てて逃げ、抗敵協会のためと言って去ったのです。(原文 E)

(沈從文はミャオ族出身の小説家。1938年に昆明で女流作家の高青子と恋愛関係にあった。)

趙清閣が書いた短編小説「落葉無限愁」には、老舎をモデルとしたと思われる邵環教授が、抗日戦勝利のあと重慶から上海に画家を追ってくる場面が出てくるが、これは当時の老舎の偽りない心情を描写しているのかもしれない。

邵環は学校に辞表を出し、帰宅すると給料をすべて妻に渡し、何も言わずにすぐに眠った。夜明け前にそっと起き上がり、ぐっすり眠っていた二人の子どもにちょっとキスして、厳しい顔付きをしている妻のほうを見ることは一度もなかった。抜き足差し足で玄関を出た。枷(かせ)のように八年間自分を閉じこめていた中庭から外に出た。数十段のでこぼこした石段の露地を抜けた。くねくねと曲がって流れる嘉陵江を越えた。重慶を出た、霧の中から抜け出た！(原文 F)

趙清閣との出会い



「文協」の事務所があった北碚。重慶の北 50km ほどの所にあり、ここで生産された石炭は嘉陵江を通して重慶へ届けられた。

1937年11月に済南中国共産党主催の「山東省文化界抗敵協会」に参加した老舎はすぐに済南を離れ、11月18日には武漢に到着した。そして12月には国民党の軍人馮玉祥(1882-1948)の招待で武昌の宿に逗留し、翌年1月には戦意高揚のための雑誌『抗到底』を創刊した。一か月半で新しい雑誌の創刊がなされるという異例のスピードは何を物語っているのか。

「私は急いで行かなければならない。」とやむにやまれぬ思いで家を出たのではなく、済南にいるときにすでにすべての話が整えられ、周到な準備がなされていたと考えるほうが自然だ。齊魯大学での職を得るためにロンドン滞在の時から周到な準備をしていた老舎が、逡巡したあげくとうとう意を決し、家族を残したまま一人で重慶に旅立ち、行きついた先で偶然馮玉祥に会ったとは考えられない。

武漢では1月中旬、周恩来(1898-1976)と馮玉祥の指揮のもと「全国文学界抗敵協会」略

称「文協」結成の準備会が開かれ三月にめでたく結成の運びとなった。このとき準備段階から共に働いていたのが趙清閣である。



右から三人目が趙清閣



老舎が趙清閣に贈った写真

趙清閣は断髪で流行の洋装に身を包み、男性に混じって臆することなく自分の意見を言い、宴席でも共に酒を飲むことができるという女性だった。幼児期に祖父から手ほどきを受けていたので古典文学の知識もあり、中国古典画は上海美術専門学校出身で相当の腕前だった。老舎が趙清閣に引かれていったのは当然のことだった。趙清閣のほうも、ユーモア好きで学識経験豊かな著名作家である老舎に、尊敬の念を抱かないはずはなかった。その感情がいつしか愛情に変わるの自然の流れだったといえるだろう。

老舎と趙清閣だけでなく、当時妻子を置いて単身で武漢にやってきた知識人が女性詩人や女優と恋に落ち同居した例は数多い。抗日戦線に勝利したあとは妻のもとに帰った者もいれば新しい恋人と結婚した者もいて、それぞれが人生の複雑な歴史を刻んだ。

趙清閣も老舎を尊敬し愛するようになったが、彼女は非常に誇り高い女性であり、自分でも言っているが「面子を重んじる」人間だった。だから同居などするはずはなかった。だが、二人がひんぱんに会って夜遅くまでいっしょに仕事をしている姿はたびたび周囲の人間に目撃され、いつしか二人は「同居している」といううわさを立てられるようになった。

胡絮青の重慶行＝女の一念、岩をも通す

老舎が武漢に去ったあと、一人で子供三人を育てていた胡絮青は1938年の秋、済南を離れ北京に戻ってきた。父の遺産分けの問題を解決し、老舎の母親と同居し、師範大学附属女子中学で再び教師として働くことになった。北京は日本軍に占領されており日に日に物資が不足していき不穏な空気が常に覆っていた。

そんなとき、重慶から一通の手紙が届いた（そのとき文協は武漢から北碚に移っていた）。老舎の友人が書いたもので、老舎と趙清閣のことを知らせる内容だった。その手紙を目にしたとき、彼女は怒りで身が震えたことだろう。すぐにでも会って真相を確かめたかったが、

そういうわけにはいかなかった。老舎の母親がまだ健在で、最期をみとるまでは北京を離れることができなかったからだ。

1942年8月、老舎の母親が亡くなった。胡絮青は弔いを済ませ母親の実家の家を担保にして旅費を工面すると、翌年10月、子供3人、お手伝いさん1人の計5人での重慶行を決行した。あちこちを経由し、荷車や列車、バスといったあらゆる交通手段を利用し、50日間かけて重慶に到着した。

老舎のほうは、胡絮青が自分のところに向かっていくことをまったく知らされていなかった。彼女たちの重慶行を手助けした老舎の友人王向辰は彼女たちを重慶で迎え、そこで止めておき、それから北碚に人を使いに出して、「奥さんや子供と一緒に暮らしたいだろう。奥さんたちが今重慶に来ているぞ」、と老舎に伝えさせた。

家族の到来を告げられた老舎は驚きのあまりワンタンを食べていた手を一瞬とめ、平静を取り戻したあと「来たからには来させてくれ」とこたえた。だが自分は重慶に迎えには行かなかった。彼は虫垂炎の手術を終えたばかりだったのだ。重慶から家族が北碚に来たのはそれから20日後のことだった。

このときのことが老舎の散文「割盲腸記」に書かれている。

10月4日、私は趙清閣さんのところに行った。彼女はこの病気にかかったことがあるのできっと適切な助言をしてくれると思ったからだ。彼女は、医者に見てもらったほうが良いと言った。そして江蘇医学院の附属病院に連れて行ってくれた。

結果はやはり虫垂炎で、老舎はすぐに手術を受け16日間後に退院した。入院から退院までの状況が事細かに、ユーモアたっぷりに面白おかしく書かれている。そして締めくくりはこうなっている。

……残念なことが二つある。一つ目は趙清閣さんと共同で書いた『桃李春風』の公演を重慶で見られなかったこと。二つ目は家族が重慶に来たとき迎えに行けなかったことだ。私は非常に妻と子供たちに会いたかった。……（原文G）

この散文が発表されたのは1944年3月だから、書かれたのは少し前で当時のことを思い出して書いたと思われる。しかし老舎はいったいどんな気持ちで書いたのだろうか。看護してくれた友人たちの名前が連ねてあるが、その中に心配して徹夜の看病を続けた趙清閣の名前は出てこない（当然ではあるが）。原稿料が当時の老舎の唯一の収入源で、老舎は書くことが好きだから何でも材料にして書くのは当たり前だとしても、趙清閣と交際しているときに「非常に妻に会いたかった」と書くことができた彼の本心は、どこにあったのだろうか。

老舎は家への手紙をあまり書いていないようだが、「家への手紙（家書一封）」という散文が1942年2月に文芸誌『文壇』に掲載されている。

××さまへ

手紙を受け取りました。とても安心しました。済〔長女舒済〕と乙〔長男舒乙〕が学校に上がったというのはとてもいい知らせです！ 子供はただ頭がいいだけでは完全とはいえません。勉強を強制しては体と心を損ないます。彼らがいくつかの言葉を知り、足し算引き算ができて、少し歴史を知る、それだけで十分だと私は思っています。体が健康で将来何かの技術を得て生活できるのであれば、大学に行く必要はありません。もし娘が踊ったり演技をしたりしてスターになりたいと言っているのを知ったら、息子が牛のように頑健な体で苦しくなるほど、疲れてしまうほど食べるのを見たら、私は必ずや喜ばしい気分になるでしょう！ 私は子供たちには自分の力で働いて苦労して食べて行ってほしいと思います。誠実な人力車引きや工場労働者は絶対に汚職役人よりは優れています。そうは思いませんか？ 彼らにたくさん遊びを教えなさい。勉強や習字を強いてはなりません。出世の機会を逃した本の虫が官吏になる機会を得たら、必ずや汚職して国の行く道を誤らせるでしょう。非常に恐ろしいことです！…
… (原文 H)

老舎の子供たちへの愛情が伝わってくると同時に、彼の人生観や職業観がよく示されている。彼にとっては人力車引きも工場労働者も決して卑しい職業ではないのだ。しかし妻は人力車の仕事を卑しい仕事とみなしていた (→胡絮青の章)。この夫婦はひよっとしたら、と思わせるエピソードだ。

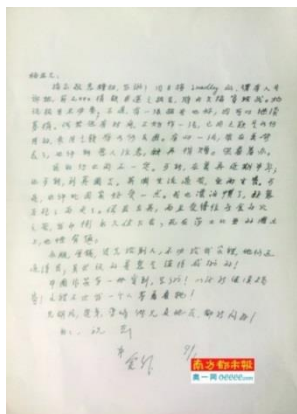
アメリカ行 「家庭を捨てた男」の烙印

1945年8月15日、第二次世界大戦が終わった。中国は抗日勝利に沸き立った。文協で活動していた文学者たちもそれぞれの場所に去っていった。老舎はどうか。公式な資料では10月に文協を「中華全国文芸協会」に改組する準備を一任され、十二月、郭沫若や茅盾ら17人の作家と連名で「アメリカ援華会作家委員会」あてに、アメリカ政府の中国内戦への介入阻止を要請する書簡を送る、となっている。

偶然のタイミングにしてはあまりにもできすぎの感があるが、1946年1月、老舎はアメリカ政府から1年間の文化講師としての招聘を受けた。胡絮青と家族を北碚に残して老舎は再び一人でアメリカに渡った。このとき胡絮青のもとには北碚で生まれた1歳の娘を含む4人の子供がいて、彼女は再び教壇に立って生活を支えなければならなかった。

老舎の家庭の問題はすでに知られていて、文壇関係者のあいだでは「老舎は家庭を捨てた男だ」という陰口がささやかれていた。

アメリカに行った老舎は1年の期間が終わっても帰国しなかった。さらに2年間自費で滞在し、その間に長作長編小説『四世同堂』を書き上げ英訳を完成させた。老舎はなぜ帰国を伸ばしたのか。



老舎が文協の事務を担当していた梅林(メイリン)に宛てた数通の手紙が、2015年春にオークションに出され、老舎直筆のものだと鑑定された。その中の1通(1947年1月9日の日付)に彼ははっきりと帰国を望んでいないと書いていた。

……

これからどこへ行くかはまだ決めていません。アメリカ滞在を半年延ばすかもしれませんしイギリスに行くかもしれません。英国での生活は苦しすぎますが、家に帰るよりはましかもしれません。私は漂泊することに慣れていて、あちこちにいきたいのです。もしイギリスに行って住むところがなく食べるものがなく大変な苦しみがあっても、ずっと住みつづけるでしょう。シェイクスピアの国で死ぬことも面白いじゃないですか。……(原文I)

1945年8月15日の第二次世界大戦の終結で抗日戦勝利に沸き立った中国だったが、共通の敵を失った国民党と共産党は10月には早くも権力を求めての武力衝突を引き起こした。

そして翌年には内戦状態に陥った。双方の軍が民衆を巻き込んで激しい戦闘を続け、数多くの犠牲者を出しながら、1949年4月に中華民国の首都であった南京が共産党軍に占領された。共産党はそれから、漢口、西安、上海、青島の重要拠点を占領していった。

このような状況のもとで7月に「中国文学芸術連合会第一次代表大会」が開催された。そこで周恩来は集まった作家たちに、老舎への帰国を促す手紙を書いてくれと演説した。これにこたえて郭沫若や茅盾たち三十名を超す文学者たちが連名で老舎に手紙を書いた。しかしこのとき、周恩来には、老舎が必ず帰国するという確信があった。彼はそのときすでに陽翰笙を通じて趙清閣に帰国を促す手紙を書かせていたからだ。

陽翰笙は脚本家・映画製作者で、1938年には「軍委会政治部第三庁主任秘書」となって周恩来の手足となって働いていた人物である。趙清閣とも仕事の関係で親しく付き合っていた。周恩来は老舎と趙清閣の関係をよく知っていて、趙清閣が帰国を促す手紙を書けば必ず老舎が帰ってくることを確信していたのだ。

老舎の友人たちが帰国を促す手紙を書いたが、彼はそのどれにもはっきりとした返事をせずにお茶を濁した。なぜ帰国をしづったのか。いくつか理由が考えられるが、その一つとして挙げられているのが「老舎は同国人同士の戦いには関わりたくなかったのだ」というものである。老舎が1946年に書いたとされる一文がある。

……内戦が始まったが、たとえどのような理由があろうとも、私はそれを信じる事が出来ない。平和は生きる道であり、内戦は死の道である。その他は詭弁だ。……

